函館本線・仁山駅

函館市医師会
函館市医師会健診検査センター
水関（みずせき）　清（きよし）

JR北海道のダイヤ改正によって、2026年３月14日に廃止される函館本線・仁山駅は、明治政府が進めた北海道の近代化の枢軸となった鉄道敷設の歴史を濃厚にうかがわせる景観の中にある。前身となる仁山信号場の設置は1936年９月15日のことであるが、函館本線自体は1902年12月10日に函館―本郷（現・新函館北斗）間で開業し、1903年６月28日には軍川（現・大沼）経由で森に延伸されていることから、不測の事態に備えるという意味合いを持つ信号場なしで、大野平野から大沼湖畔に至る20‰という急勾配区間を昇り降りするという過酷な環境の中に、鉄道が敷設されたのである。

ここで日本の鉄道について振り返ってみると、1872年10月14日の東京・新橋―横浜間・約29キロでの開業を嚆矢として、1877年２月５日の神戸―京都間がそれに続いた。1880年11月28日、北海道で国内３番目として手宮―札幌間に鉄道が敷設されたのには、明治政府が推進した殖産興業政策の一環としての意味合いが強く、1882年11月13日には手宮―岩見沢―幌内間が全通し、幌内炭山の開発と鉄道による石炭輸送が進められた。1892年11月の段階で炭鉱と港湾とを結ぶ鉄道路線は、手宮―幌内（幌内線）、岩見沢―空知太および砂川―歌志内（空知線）、岩見沢―室蘭および追分―夕張（室蘭線）が整備され、空知・夕張の各炭鉱の産出炭を、手宮・室蘭の港湾から積出すルートが確立された。

1875年に始まった屯田兵制度等によって道内の人口は急増し、その移動を支える鉄道網の拡充も進んだ。1905年８月１日には函館―札幌間が鉄道によって結ばれ、鉄道国有化後の1908年３月には青森―函館間の航路も国有化され、本州―北海道の輸送体系が確立した。北海道の「炭鉱」、採掘された石炭を輸送した「鉄道」、その石炭を使った「鉄鋼」、本州に運ぶための「港湾」を複合的にとらえたストーリーは、文化庁日本遺産「炭鉄港」として2019年に認定された。

同じ頃本州では、高品質な生糸の集積センター・前橋と貿易港・横浜との間を、鉄道で直接結ぶ計画が進められ、1883年７月に上野―熊谷間、翌年、熊谷―高崎―前橋間が開業した。そして、江戸開府当時は海や沼地だった上野―新橋間を避け、山あり谷ありでかつ遠回りでもあるが、困難を覚悟のうえで建設を始めた品川―新宿―赤羽間の山手線が1885年３月に開通して、前橋―赤羽―新宿―品川―横浜という生糸輸出を支える鉄道路線が確立された。「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、2014年に登録された世界遺産である。

明治から昭和初期にかけて、関東以北で最大の都市・函館は、北海道・本州間の物流と人の移動の観点から見た結節点であった。函館―小樽間の鉄道建設は、私鉄の北海道鉄道によって、函館側からと小樽側から着工され、1902年12月に函館―本郷間と蘭島―然別間が同時に開通した。以後断続的に開通を重ねて1905年８月の高島（現・小樽）―小樽（現・南小樽）間を最後に全通し、1907年７月に国有化された後の1909年10月に全線が函館本線になった。

1903年に仁山地区を通る鉄道が建設された後、仁山駅の前身となる仁山信号場が設置されたのは前述したように、33年後の1936年のことである。その構造はスイッチバック式の信号場であったが、設置の背景に、大正末期から昭和初期にかけての北海道では、最重要列車としての樺太連絡を担う函館桟橋―稚内港間（急行区間は滝川まで）列車の位置付けがあったと思われる。それら急行１・２列車は、SLが牽引する長大編成で、２等車や２等寝台も連結されており、大沼湖畔への上り勾配を確実に克服するための信号場設置だったと考えられる。1930年10月のダイヤ改正で、函館桟橋―稚内港間の所要は、18時間02分にまで短縮されたという。

さらに７年後の1943年になると、函館方面からの下り線側に“加速線”（大沼湖畔に向かう上り勾配へと出発する際に、一旦バックして勢いをつける）を付帯するために、構内の改良が図られ、1944年には信号場舎を現在の仁山駅舎の位置に移転させるとともに、仮乗降場として旅客扱いが開始された。この際に仁山駅への取付道路建設に必要な土地を提供したのが大道寺小市医師であり、その顕彰碑が、駅舎建設のはるか後年にあたる1997年になって、JR北海道名で駅舎の隣接地に建立され、現存している。

顕彰碑の裏面には、小市氏（1885-1945）の三男・小三郎氏（1925-2005）による補記が刻まれている。それによれば小市氏は、山形県長井町五十川の生まれで、医師免許取得後、東大病院などを経て、1924年に日高の静内地方で開業し、自らが経営する病院のほかに、別棟としてあったアイヌ民族の病院の院長も兼ねて医療に奔走し、「日高の赤ヒゲ」と呼ばれていたという。1927年に留学したスイスのベルン大学で医学博士を取得後、帰国。1931年には函館市若松町で診療所を開設し、1940年には、新川町で20床の病床を備えた大道寺病院となった。そして、函館を一望できる仁山の地に24ヘクタールという広大な土地を求めて、西欧に範をとった結核サナトリウム（療養所）建設を構想したが、終戦の年に発疹チフスに感染して他界されたことが記されている。補記を認めた小三郎氏は、みちのく銀行（現・青森みちのく銀行）頭取としてロシアに積極的に進出するなど、他行とは一線を画した経営手腕を発揮した銀行家として知られる。

仮乗降場となった仁山駅は、その後1947年、1950年、1952年と３度にわたる駅昇格運動を経て、1987年の国鉄民営化時に、JR北海道の旅客駅となった。国道５号線に接続する道道96号上磯峠下線から仁山駅方面への分岐点には、現在でも「ニヤマレジャーセンター」と大書された案内塔が残り、そこにはスキー場、温泉ホテル、キャンプ場、遊食広場などの付属施設が掲示されている。往時茫々の「ニヤマ高原」なのである。